

interview インタビュー

10歳のときに、ツタンカーメン王の墓を発見したハワード・カーターの伝記に出会って以来、エジプトに魅せられ、約40年にわたってエジプトと日本を往復している吉村教授に、考古学の意義、自身の歴史観、9・11事件とイスラム社会、日本の進む道等についてお聞きした。

(聞き手：石黒清子、中里妃沙子)

プロフィール よしむら・さくじ

1943年東京生まれ。早稲田大学教授。工学博士。早大入学後、古代エジプト調査隊を組織し、現地での研究活動を行なう。カイロ大学考古学研究所へ留学。発掘調査の数々の成果により、国際的評価を得る。エジプト考古学者として活躍する一方、TVや講演会等、幅広い領域で活動している。主な出演番組は『世界・ふしぎ発見!』(TBS系)等、著書は『痛快!ピラミッド学』(集英社インターナショナル)、『ヒエログリフで学ぼう!』(荒地出版社)等。

information

吉村作治 写真展

悠久のエジプト—5千年の時を超えて

2004年8月17日(火)~10月2日(土)

10時~17時30分 日曜・祝日休館 入場無料

キャンノンSタワー2階オープンギャラリー(品川駅下車)

エジプト考古学者
早稲田大学教授

吉村作治さん

——発掘調査の予算は、大学からでていると誤解している人が多いと思うのですが。

大学の予算からはゼロです。寄付の際に、エジプト考古学研究という目的付けをしてもらおうと、大学が10%差し引いて、研究費として受け取ることができるわけです。

——やはりバブル崩壊後は、寄付も減っているのでしょうか。

全然だめですね。発掘には1年間に1億円かかるのですが、今は7000万円位です。考古学はナノテクなどと異なって、お金を生まないし、今は企業にも余裕がないので、寄付も減っています。しかし、企業は夢を持つべきですし、前向きなものにはお金を出して欲しいですね。

——考古学は、前向きな学問なのですね。

考古学は未来学です。現在は瞬時になくなり、我々は過去しか持っていない。未来はつくっていくものなのです。過去が長いほどデータがたくさんあるからシミュレーションできる。我々は過去を知らずして未来は語れないので

す。弁護士さんが判例を勉強することと同じですよ。未来を知るために過去を学ぶということは重要なことなのに、学校の歴史の授業ではこれを教えていないし、国家そのものが歴史を勘違いしています。教えれば子供は未来に向かいます。歴史に残るのは異常な出来事ですが、たとえば、何故オリンピックが開かれるようになったのか、何故アレキサンダー大王はペルシャと戦わなければならなかったのか、歴史の中の出来事には意味があるということを教えなければならぬ。そうすれば歴史はおもしろくなるのです。

——そういった歴史観を前提にすると、9・11テロ、イラクの問題についてはどのようにお考えですか。

テロという行為は、どんな大義があろうとも、許されないことです。しかし、誰がやったのかについて、きちんとした検証が行なわれていないし、総括もされていません。本当にイスラム過激派がやったのか、どのような理由によるものなのか、証拠もないのにビンラディンがやったとしてよいのか。あるいは、イスラムがいかに残酷でひどいか

を世に知らしめるためのモサドあるいはCIAの謀略という説もありますね。しかし、これも証拠はありません。何故、事件が起こったのか、その理由を考えなければなりません。しかし、誰がやろうと、関係ない人間をまきぞえにして殺すということは許されない。そこには正義はありません。我々が9・11事件から学べることは、現時点ではそれしかありません。

もちろん、一番可能性として高いのは、ビンラディン一派とはいえます。しかし、よく見るとその後の世界の流れはあまりにもスムーズ過ぎる。最初に歴史の年表を作って、そのとおりに起こっているかのようで、あやしいと僕なんかは思うわけです。実際の歴史年表をよく見ると、整合性のある年表などないことがわかる。実際の歴史は、もっとハプニングの連続です。アフガン問題、イラク問題など、皆さんにはハプニングに見えるかもしれないが、それらを年表に落とし込んで全体として見るならばスムーズに進んでいる。歴史年表として世界の動きを見るならば、年表が先にあり、スケジュールに従っているかのように見えるわけです。

——9・11前からシナリオが続いているということですか。

シナリオというより、思惑があったということではないでしょうか。

——誰の思惑ですか。

もちろんユダヤ人の思惑ですよ。4000年前にヘブライ王国ができてから、ユダヤは現在のチグリス・ユーフラテスに戻りたいと思っているのです。ユダヤの元はヘブライ。ヘブライの元祖はアブラハム。アブラハムはイラクの古代都市ウルクの出身なのです。今のサマワの南のバスラの近くのはずれの町の出身なのです。ヘブライ王国の再建が彼らの宿願であり、ブッシュを利用して宿願を実現しようとしていると考えることもできます。そういう意味で、9・11はイラクを攻撃する理由にしているともいえます。現在、ユダヤ人はアメリカを牛耳っていますが、ヨーロッパはキリスト教社会なので、ユダヤ人が牛耳ることはできません。イラクへの侵攻にヨーロッパ各国が反対したのは、ユダヤにひきずられたくないという意味もあると思います。

——それでは、アメリカ、ヨーロッパ世界に対して、アジアの存在はどのようなものとお考えですか。

僕は、ユダヤ、キリスト、イスラムで世界の3分の1の人口しかいないのに、他の3分の2を無視しているのはおか

しいとメディアに書いたことがあります。現在の世界の3分の2の争乱は、この3つの宗教間の紛争です。その意味で、実は4000年前から、ずっとアジアはこの世界の仲間に入り切れていないのです。

小泉首相はアメリカに追随しているように見えますが、しかし、一番大事なことは、日本はこれからどうするかということです。3つの考えがあると思います。アメリカか中国か、独立か。アメリカと中国のバランスをとる考えもあります。湾岸戦争の際、僕は、日本が進む道は、中国を中心としてアジアの各国と、まず緩やかな経済連合をつくり、その後政治的な連合をつくる、そしてEU、アメリカ、西アジア、アフリカ等、5つか6つのグループが共栄すればよい、そうすれば国連は不要となるという構想を持ちました。そのためには、靖国問題について文句を言われる筋合いはないと思っていますが、中国との関係修復は必要だと考えています。

アメリカは、北朝鮮問題のために、日本に軍隊を駐留させているように思わせていますが、日本をコントロールするために、北朝鮮をことさら大きく見せているだけともいえます。アメリカは日本に基地がなければ、地球を同時に支配できないのです。イラクへ派兵された多くは、沖縄の基地から行っています。このようなことは歴史を勉強すればわかることです。歴史を学ぶことで、現在の世界を理解することができるということが、考古学を勉強することの神髄なのです。

——イスラムの市井の人々は、日本人をどう見えていますか。

基本的には、日本人には好意的です。日本の政権がアメリカに追従しているが、本来の日本人はああいう人たちではないと見えています。

20年前のエジプトは貧しかったですが、現在は豊かになっていて、プライドがよみがえっています。しかし日本人は、どんなに豊かになってもプライドが戻りません。私は、これを広島・長崎に原爆が落ちて、ピカドンで全ての武士道、サムライの心は飛んでしまった、ピカドン症候群と呼んでいます。

(構成：中里 妃沙子)



我々は過去を知らずして未来を語ることはできない。
弁護士さんが判例を勉強するのと同じことですよ。